

20世紀初頭バンクーバーにおけるインド系移民 コミュニティの形成

水上香織

1 はじめに

20世紀初頭の北米太平洋岸におけるインド系移民の存在は、これまで二つの大きな事件によって注目されてきた。すなわち、1914年にバンクーバーで起こった駒形丸事件¹と、1913年から1918年にかけてサンフランシスコを中心に北米やアジア諸地域のインド人によって展開された反英運動、いわゆるガダル運動（Ghadr Movement）である²。これらの事件は、個人的に活動する政治運動家だけでなく、現地の移民集団をも巻き込んで展開されたことで特徴的である。たとえば、駒形丸がバンクーバーに停泊していた1914年5月末には、フサイン・ラヒーム（Hussain Rahim）らの運動家によりバンクーバーで集会が催され、500人から600人のインド人がつどい、駒形丸を援助するための寄付金が現金で5000ドル集まったとされる〔Johnston 1989: 40〕。また、ガダル運動においては、1915年にインドで反英武装蜂起を実行するため移民たちの集団帰国が行われたが、このときインドへ帰った移民は5000人にのぼったとも言われる〔Bose 1971: 123〕。

しかしながら、ジョンストンやボースに代表されるこのような政治的事件に関する研究では、事件において中心的な役割を果たした政治運動

執筆者紹介

みずかみ かおり ● 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程、日本学術振興会特別研究員 DC 南アジア近現代史

・水上香織、2013、「インド民族運動家と移民社会—20世紀初頭カナダを例にして—」、修士学位論文。

家の動向を追うものが主だった。つまり、この運動に参加していくことになる移民集団がどのように形成され、いかなる社会生活を送っていたのかといった、移民たちの歴史的・社会的背景については主たる関心となつてこなかった。

また、インド系移民による駒形丸事件やガダル運動への参加は、しばしばインド系移民内の政治意識の高まりと関連付けて論じられてきた。特にブキンヤーニーとインドラは、インド系移民が妻子呼び寄せ禁止への反対など移民たち自身に直接的に関わる問題について対応していく過程でコミュニティとして結束力を強めていったことを指摘し、その延長上にガダル運動の展開を論じた [Buchignani and Indra 1981]。インド系移民コミュニティの凝集性を高め得た要因としては、上述のような移民差別への対抗に加え、スィク教寺院を中心とした宗教的結束に関しても従来指摘がなされてきたが [Buchignani and Indra 1980: 207-208, 211; Singh and Singh 1966: 14-15]、移民集団の結束を考える上で重要であるはずの経済的な相互関係という点はほとんど議論されていない。

そこで、本稿では第一にこのような政治的事件を生み出した北米のインド系移民社会の社会的・経済的特徴について精査し直し、第二に、移民たちの経済的な利益の追求過程や経済活動そのものと並行してインド系コミュニティの凝集性が高まる場合があったことを事例とともに示す。この議論を行うために、特に20世紀初頭に最も多くのインド系移民人口を抱える北米の都市の一つであったバンクーバー市に焦点を絞り、生活実態の数量的な分析と都市空間構成、および社会的紐帯の事例から二つの事件を生み出した社会的基盤の一端を明らかにしたい。

2 北米へ向かったインド人―出稼ぎ的自由移民―

インド系移民が北米に入り始めるのは、19世紀末から20世紀初頭にかけてである。従来の研究では、しばしば、インド系移民は最初にカナダ太平洋岸へ多く入り、カナダでの移民制限強化に伴ってアメリカ合衆国(以下、合衆国)まで移民地を南下させていったと説明してきた [スーチェン・チャン 2010: 26-27; Singh and Singh 1966: 12]。しかし実際に移入数を比較すると、カナダでも合衆国でも移入数に大きな変化が起こる時期や傾向はほぼ一致している。たとえば、カナダでも合衆国でも、インド系移民の移入数は1907年に急増し、ピークを迎えた。表1に示される

表 1 インド系移民、カナダ及び合衆国への移民数（1899～1920 年）

移民年	カナダへの移民	米国への移民	移民年	カナダへの移民	米国への移民
1899	n.d.	15	1910	10	1782
1900	n.d.	9	1911	5	517
1901	n.d.	20	1912	3	165
1902	n.d.	84	1913	5	188
1903	n.d.	83	1914	88	172
1904	n.d.	258	1915	0	82
1905	45	145	1916	1	80
1906	387	271	1917	0	69
1907	2124	1072	1918	0	61
1908	2623	1710	1919	0	68
1909	6	337	1920	0	160

[Das 1923: 4、5、10、11] により作成。

カナダへのインド系移民の移入数について、公的な記録が始まるのは1904年7月以降である [Bhatti 2007: 28-29]。本表におけるカナダへの移民数は、会計年度ごとの集計である [Das 1923: 4-5]。カナダの会計年度は、1899年は1月に始まり12月に終わる。1900年は1月から6月30日までの6か月間である。1901年から1906年までは7月に始まり6月で終わる。1907年は7月から3月31日までで、1908年以降は4月に始まり3月に終わる [Canada Year Book 1914: 85]。

ように、1907年のカナダではインド系移民の移入数は前年に比べて5倍以上に急増して2000人を超えており、合衆国では、1907年には前年の3倍以上にあたる1000人を超えるインド人たちが到着している。そして、このような大規模な移入はカナダでも合衆国でも2～3年しか続かなかった。特にカナダでは、1908年に移民を制限する枢密院令が出されると、1909年以降インド系移民の移入数は激減した³。合衆国でもアジア人排斥の高まりやアジアからの移民制限に重点を置いた1917年移民法の影響でインド系移民の移入数は減少していった [Das 1923: 16]。このように、20世紀初頭に北米へ押し寄せたインド系移民の波は、1907年に急激に大きくなったものの、極めて短期間のうちに押しとどめられたのである。

北米に入って来たインド系移民の人口は、カナダにおいても合衆国においてもそのほとんどが太平洋岸に集中していた。カナダでは、1911年のインド系移民全人口2342人のうち約98%にあたる2292人が太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア州に在住していた⁴。また、合衆国では1910年のインド系移民全人口2545人のうちの約95%にあたる2414人が、ワシントン州、オレゴン州、カリフォルニア州の三つの太平洋岸の州に集まっていた⁵。

こうした太平洋岸へのインド系移民の人口集中は、同時期に北米太平洋岸が急速な発展のただなかにあったことと大きく関係しているだろう。本稿で中心的に扱うカナダのバンクーバー市の人口は、1901年には2万8895人であったが、1911年には12万3902人となり、20世紀の初めの10年間のうちに4倍以上の増加をみせている [Canada Year Book 1914: 48]。

北米太平洋岸にやって来たインド人たちの多くは、パンジャブ地方の出身であった [Das 1923: 3]。パンジャブ地方では1860年代以降、海外への大規模な移民が始まり、香港、ニュージーランド、英領マラヤ、東アフリカ、北米など世界中に移民が進出した [Tatla 2004: 45, 50]。タトゥラは、パンジャブからの海外移民においてはスィク教徒のなかでも土地を持つ比較的富裕な農民集団であるジャートが多数を占めていたとする。その理由として、スィク教徒のジャートが「軍事適応種族 (Martial Race)」とみなされてインド軍に編成され海外へと送られたことと、パンジャブにおける同時代の灌漑農業の発展によって農民たちが蓄財し海外渡航が可能になっていたことを挙げている [Tatla 2004: 47]。

海外移民を促した要因についてのタトゥラの説明は、カナダ太平洋岸に到達したインド人に関してよくあてはまる。なぜなら、カナダへの移民は、香港や英領マラヤに配属されていたインド軍の元兵士らがよりよい就労場所を探す中で始まるようになり [Bhatti 2007: 28; Singh 1907: 387]、のちには、カナダの情報をインドで得た人々のうち、必要な資金を融通できた者が北米へと向かったためである。カナダにやって来るインド人の移民の動機と方法について1908年に調査が行われた際には、証人として集められた14人のインド系移民のほとんどは、インドにおいて在米の親戚や知人からの情報を得て、カナダでの高収入を期待し、渡航したと証言している [King 1908: 76-80]。渡航に際しては、移民たちの多くが土地を抵当に置いて金貸しから借金をしたり、牛や馬などを売ったりして、200ルピーから300ルピー程度の費用を捻出していた [King 1908: 76-79]。報告書中で証人14とされた人物は渡航のために300ルピーを借金していたが、彼の地元での貯蓄額は1日に4アンナであったため [King 1908: 79]、300ルピーは彼がインドで3～4年働かないと貯蓄できない額に相当していた。カナダへの渡航にはそれほど多額の費用が必要だったのである。しかし、視点を変えれば、移民たちは土地や家畜などの財産を持っていたためにそれだけの金額を用意できたのだ

とも言える。少なくとも、報告書中の証人の中には年季契約を結んで渡航費を前借してきたような移民はみられなかった〔King 1908: 76-80〕。カナダへ到着したインド系移民たちは、よりよい収入を期待して能動的に移民することのできた自由移民であったのである。

さらに、こうした移民は出稼ぎ的な性格であった。彼らは数年カナダに滞在した後は、インドへ帰国することを考えていた。後述する1908年のインド系移民ブリティッシュ・ホンジュラス移送計画の際に、ブリティッシュ・ホンジュラス長官はカナダ太平洋岸のインド系移民労働者について調査し、以下のように記録を残している。

私がバンクーバー、ロブソン、ネルソンで会ったインド人たちは、自分たちの状況にたいへん満足しており、インドに送金しているとのことだった。彼らは、あと3年はここにおいて、その後インドの家族のもとへ帰るつもりだという。——（中略）—— インド人たちはブリティッシュ・コロンビアに定住する考えではない。最も裕福な人々でさえ家族を呼び寄せようとは考えていない。彼らはみな、金を貯めてインドに帰って、抵当に入れた家を取り戻したり、買い物をしたたりしようとしているのだ。⁶

カナダへやって来たインド系移民は出稼ぎ的性格が強く、定着志向性の低い集団であったのである。実際に1921年のカナダにおけるインド系移民の人口をみると、1911年から半減して1016人となっている〔Canada Year Book 1922-23: 160-161〕。1910年代にカナダ在住のインド系移民人口が減少した理由として、先行研究ではガダル運動への参加に伴う帰国の影響〔浜口 2000: 209〕や、カナダに入ってから時間の経過および移民たちの受けた苦難〔Buchignani et al. 1985: 67〕を指摘している。いずれにしても、1911年の時点でカナダに在住していたインド系移民の過半数は10年以内に同地を去っていたのであった。

さて、移民たちは、ひとたびカナダに入るとどのような職業につき、どのような場所に暮らしたのだろうか。次節では彼らの生活像について検討する。

3 1911年カナダ・センサスによる バンクーバー・インド系移民の具体像

カナダにやってきたインド系移民の具体的な生活像は、カナダ・センサス資料から窺うことができる。19世紀以降にカナダで行われたセンサス調査の個票は、マイクロフィルム化されて、カナダ国立図書館・文書館(Libraries and Archives Canada)で所蔵されている。センサス資料の一部はさらにカナダ国立図書館・文書館のウェブページ上で公開されており、1911年センサスに関しては調査票1のマイクロフィルム資料を閲覧することができる⁷。

1911年センサスの結果はカナダ統計局によって『第5回カナダ・センサス(Fifth Census of Canada 1911: 1912-1915. 6 vols.)』といった報告書の形にまとめられたが、こうした報告書からはインド系移民の地域ごとの人口情報程度しか得ることができない。また、先行研究においても個々の調査票からインド系移民についての情報を抽出し直したものは管見の限り皆無である。そこで、本節では1911年においてカナダの全インド系移民人口のうち約3分の1が集まっていたバンクーバー市を選び、網羅的に個票を閲覧したうえでインド系移民の情報の抽出を行った⁸。バンクーバー市全体のおよそ12万3900人分の個票を分析した結果、センサス報告より27人多い753人がインド系移民として判断できた⁹。

それでは、抽出されたインド系移民についてその詳細を検討しよう。まず、753人は全員男性であった。年齢は20代から40代が全体の9割を占めており、働き盛りの男性たちの集団であったことがわかる。彼らの婚姻状況をみると、未婚者は398名で5割程度であり、既婚者は305名で4割にのぼった。既婚のインド系移民たちは配偶者を残してバンクーバーへ渡航していたことになる。そもそも、カナダへのインド系移民の妻子呼び寄せは1919年まで禁じられており[Buchignani et al. 1985: 72]、結果的に同地のインド系移民の多くが男性単身世帯となっていたと考えられる。

1911年のバンクーバー居住インド系移民の職業については、表2に示した通り、彼らの過半数は製材工場で働く非熟練労働者であった¹⁰。製材工場労働者人口の多さは、インド系移民だけではなく、バンクーバーのアジア系移民に共通する特徴であった。1890年代から第一次世界大

表2 1911年カナダ・センサスによる在バンクーバー・インド系移民職業分類表

大分類	小分類	就業形態	平均年収（\$）	人数	小計
林業	製材工場労働者	非熟練	399.06	428	446
		熟練	442.85	7	
	材木置き場労働者	非熟練	399.33	6	
		林業従事者	472.5	5	
農業	農業従事者	非熟練	385.33	3	18
		植木屋	400	5	
	建設業従事者	非熟練	504.16	10	
建設業	建設業、請負労働者	非熟練	425	10	107
		大工	500	1	
	灌漑用工事労働者	非熟練	407.55	96	
運送業	運河関係請負労働者	非熟練	410.6	102	124
		熟練	500	3	
	鉄道関係労働者（整備）	非熟練	549.16	18	
		道路施設業従事者	600	1	
製造業（機械、織物）	工場労働者（機械、織物）	非熟練	n.a.	19	19
商業	不動産業	オーナー	1000	11	24
		熟練	750	1	
		仲介者	475	4	
	商業従事者	非熟練	550	2	
	食料・雑貨店オーナー	オーナー	n.a.	3	
	倉庫管理人	非熟練	395	3	
サービス業	カントリークラブ従業員	熟練	500	5	3
		オーナー	n.a.	1	
	仕立屋	熟練	380	1	
		非熟練	250	1	
公務	公道敷設・管理業従事者	非熟練	580	3	3
専門職	スイク教寺院聖職者	n.a.	n.a.	1	2
	新聞編集者	n.a.	n.a.	1	
合計				753	753

1911年カナダ・センサスのバンクーバー市個票から抽出したインド系移民についての情報を基に筆者作成。
 なお、n.a.は原本に記載が無いことを表す。

戦までは、製材工場におけるアジア系移民労働力、特に日系移民労働力の割合が増加し続けた時期だったのである [McDonald 2000: 103]。1911年在バンクーバー・インド系移民において製材工場労働者以外に職業人口の多い職種を探すと、運河関係請負労働者や、灌漑工事労働者がおおよそ100名ずつでそれぞれ全体の13～14%を占めている。いずれの職業でも、ほとんどが非熟練労働者であったことを確認できる。

また表2からは、食料雑貨店、仕立屋や不動産関係において、自営の実業家とその事業に付随して雇用されている被雇用者の存在も確認できる。彼らは、製材業など主要な地域産業での被雇用者数と比べると極めて少数であったが、インド系移民在住者そのものの生活と生存に結び

ついた生業に依拠していた点は、本稿が示唆しようとしているインド系移民内の社会・経済的凝集性との関係で大きな意味と可能性をもっていたと考えられる。

さらには、スィク教寺院聖職者や新聞編集者も、バンクーバーのインド系移民たちの文化的生活を考えるうえで重要な存在である。新聞編集者はセンサス個票ではシング・クマール (Singh Kumar) と表記されているが、これは当時バンクーバーにやって来ていた民族運動家の G・D・クマール (Guru Dutt Kumar) と同定できる。G・D・クマールは1909年に「祖国に奉仕する者たちの集い (Swadesh Sewak Home)」を組織し、1910年1月からパンジャビー語の月刊紙『祖国への奉仕者 (Swadesh Sewak)』を出版し始めるが¹¹、同紙に書かれた組織の住所 (1632 2nd Ave, W. Vancouver)¹² はセンサス個票のシング・クマールの住所と一致するためである。『祖国への奉仕者』はカナダとアメリカでおおよそ500部流通したほかに、インドへも多く流通したとされる¹³。

さらに、1911年カナダ・センサスでは前年の収入に関しても調査している。インド系移民として抽出した753人中1910年の年収の記載があったのは669人で、この全員の平均値をとるとインド系移民の平均年収は413.71ドルであった。職業別の平均年収に着目すると、最低値は仕立屋として働く非熟練労働者で250ドル、最高値は不動産業オーナーの1000ドルである。しかし、全体としては職種による大きな傾向の差が見られるわけではなく、どの職業に就いていても年収は400ドルから600ドルの間であることが多かった。

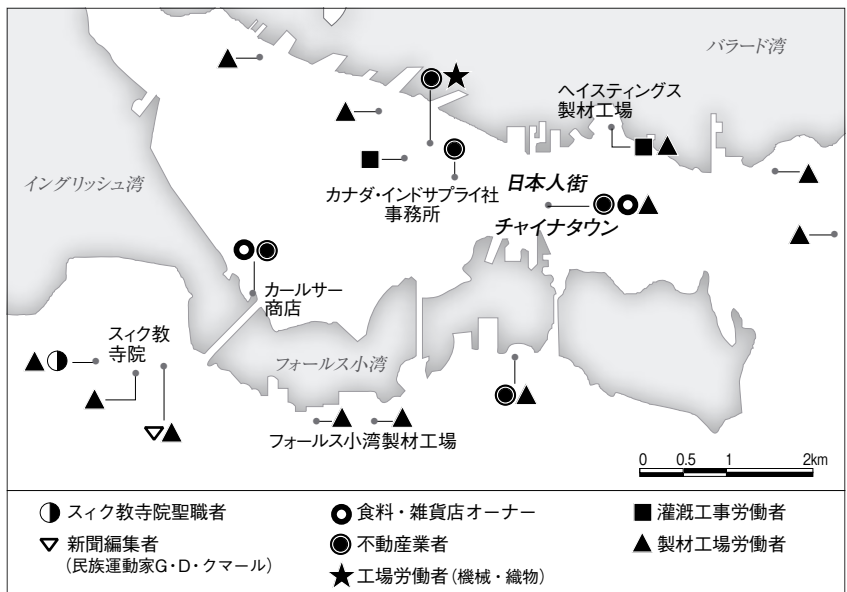
平均約413ドルという年収は、当時において相対的にはどれほどの価値があったのだろうか。1911年のバンクーバーにおける世帯主の職業別平均年収をみると、肉体労働者の平均年収は629.30ドルで [McDonald 2000:102]、1910年の在バンクーバー・インド系移民平均年収の1.5倍程度であることがわかる。インド系移民たちは、バンクーバーにおいて相対的に安価で労働力を提供していたのである。

しかしながら、1910年の在バンクーバー・インド系移民の平均年収は、彼らがインドにおいて見込めた収入と比べると、かなり高額であった。たとえば、多くの在北美・インド系移民たちの出身地はパンジャブ地方であったが、その中心都市ラホールにおいて1911年にインド北西鉄道整備場で働いていた労働者の平均年収は、熟練労働者の組立工で67.19ド

ル、非熟練労働者で35.56ドルであった[*Prices and Wages in India 1912*: 210]¹⁴。1910年の在バンクーバー・インド系移民の平均年収は、この熟練労働者たちの6倍以上、非熟練労働者たちの11倍以上にあたる。インド系移民たちが出稼ぎをするメリットになるような大きな収入差が、インドとカナダの間には確かに存在していたのである。

最後に、インド系移民の職業別の空間分布について検討する¹⁵。地図1に示されたように、インド系移民の多くはバラード湾に面した臨海地域（Waterfront）と呼ばれる一帯と、イングリッシュ湾から内陸に流れ込むフォールス小湾（False Creek）の南岸に多く暮らしていた。こうした地域は、どちらも製材関係の工場の集中する工業地域であった。バラード湾周辺は1880年代までは鬱蒼とモミの木の茂る僻地であった。しかし、19世紀後半以降フレーザー川のゴールドラッシュで利益をあげたヨーロッパ系の資本家たちが同地に複数の製材工場を設立し、開発を進めていった[McDonald 2000: 4-7]。そのなかでも、ヘイスティングス製材会社（Hastings Sawmill Company）は特に規模の大きなものであ

地図 1 1911 年在バンクーバー・インド系移民 職業別分布図



[McDonald 2000: 192] を基に作成した地図上に、センサス個票から得られたインド系移民の分布状況を加えた。

た。センサス個票からは、1911年にインド系移民64名が同社で雇用されていることがわかる。そして、フォールス小湾沿いにも、製材工場や木材から屋根板・窓枠・ドアなどを製作する加工場が立ち並んでおり〔McDonald 2000: 124〕、インド系移民もフォールス小湾製材工場（False Creek Lumber Co. Saw Mill）等で働いていた。インド系移民の居住地決定は、この時代のバンクーバー製材産業の発展状況に呼応したものであったと考えられる。

加えて、フォールス小湾の沿岸にはインド系移民たちが集まる場となり得るシク教寺院が立地し、寺院の近くには新聞編集者であり民族運動家のG・D・クマールが居住していた。さらにその近辺には、インド系移民の経営する仕立屋や、雑貨屋の「カールサー商店（Khalsa Store Groceries）」、不動産屋の「インド不動産社（India Realty & Insurance Co.）」、「カナダ・パンジャブ投資信託（Canada Punjab Investment Co.）」も集まっていた〔Henderson's Greater Vancouver City Directory 1911, part 1: 321, 445〕。フォールス小湾周辺では、インド系移民たちの中だけで生活が成り立つような「インド人街」とまではいかないまでも、インド系移民の生活の基盤を支えるような施設や商店が集中していたことがわかる。

以上のセンサス個票の分析により、1911年の在バンクーバー・インド系移民の就業状況、年収や居住地に関してきわめて詳細な情報を得ることができた。インド系移民たちは、当時のバンクーバーの基幹産業であった製材業に従事することでバンクーバー経済を支え、また自分たちの就労場所を確保していた。彼らの多くは非熟練労働者として働いており、年収はバンクーバー全体の肉体労働者の年収の3分の2程度だったが、インドで見込める年収よりは6倍から11倍高かった。また、インド系移民の中からは、シク教寺院の聖職者や食料・雑貨店を営む者など、インド系移民の生活に必要なサービスを提供し得る人々も現れていた。

4 インド系移民の社会的紐帯と経済的利益

4-1 ブリティッシュ・ホンジュラス行きを巡る議論

本節では、インド系移民が自身の経済的な利益を追求する過程あるいは経済活動を展開する過程と並行して、インド系移民コミュニティの凝集性が高まっていく場合があったことについて、2点の事例をもとに検

証する。

第一に、カナダ連邦政府による1908年の在カナダインド系移民のブリティッシュ・ホンジュラス（現在のベリーズ）移送計画の際に起きた出来事についてみてみよう。1908年にカナダ移民局が調査をおこなったところ、ブリティッシュ・コロンビアには約3000人のインド系移民がおり、そのうち700人程度が失業中であるということがわかった [Bhatti 2007: 113-114]。調査の前年である1907年にはカナダ全体が不況に見舞われ、白人労働者でさえ職を得るのが厳しい状況であった¹⁶。そこで、カナダで失業中のインド系移民を、農業労働力の不足している中米のブリティッシュ・ホンジュラスへ移動させるという計画がカナダ連邦政府下で浮上したのである [Bhatti 2007: 113-114]。一方で、この計画の対象者は実際にはインド系移民の中の失業者であったにもかかわらず、白人労働者におもねるような地元の新聞においては、インド系移民たちがコミュニティ全体として貧富を問わずブリティッシュ・ホンジュラスへ強制移動させられる動きがあるかのような報道がなされた。こうした報道により、インド系移民たちの間では、同計画は全インド系移民たちを対象とした強制国外追放計画であるとして認識された¹⁷。

この計画を巡り、実際にカナダに住むインド系移民の代表がブリティッシュ・ホンジュラスへ派遣され現地の様子を視察するなど、実行に向けた具体的な動きも見られたが、結局まとまった人数での移住はほとんど行われなかった [Bhatti 2007: 127, 129-130]。その理由として、計画に対する移民たちの強い反対行動が起こったことや、カナダの景気が回復したことなどが挙げられる。ブリティッシュ・ホンジュラス長官が1908年12月にブリティッシュ・コロンビアを視察して同地からインド人自由移民労働者を連れてくる可能性について調査した時点では、失業中のインド系移民はほとんど見つけることができなかった¹⁸。

ブリティッシュ・ホンジュラスへの移送計画は、まさに計画倒れに終わったものであった。しかしながら、計画への反対を通じて最終的に移民内で社会的紐帯が形成されていった過程は、1908年当時の在バンクーバー・インド系移民たちがいかにコミュニティ内の立場の相違や流動性を内包しながら紐帯を形成し得たのかを考えるうえで注目に値する。具体的な経過に関して、以下にその詳細を確認したい。

ブリティッシュ・ホンジュラスへのインド人移送計画を強制国外追放

計画だと捉えたうえで、インド系移民たちの間では強い反対行動が起こった。彼らが計画に反対するうえで、最も決定的だったのは、ブリティッシュ・ホンジュラスで見込める収入がカナダに比べてかなり少ないことだった。先に示した通り、バンクーバーにおける1911年時点でのインド系移民の年収は平均413ドルであったが、これは12ヶ月で割ると1ヶ月およそ31ドルの収入ということになる。他方、ブリティッシュ・ホンジュラスで見込める収入は、食事が出される場合には1ヶ月8ドル、食事無しの場合には12ドルということであった[Bhatti 2007:116]。インド系移民たちはより多い収入を望んでやって来たのであるから、彼らはブリティッシュ・ホンジュラスへの移動に何の魅力も見出せなかったのである。

また、カナダに既得権益のあるインド人実業家たちは、同計画に特に強く反対し、対応策を講じ始めた人々であった。ブリティッシュ・ホンジュラス長官の報告書ではその内容を次のように示している。

月に4万ドル近くも蓄え、そうした大金を銀行に貯蓄してインドに送金するような裕福なインド人たちは、自分たちにとっての裕福な暮らしが奪われないようにするためにある組織をたちあげることに決めた。それは実際には労働組合であり、集合場所として、2年前に建てられたスイク教寺院 (Fairview, 2nd Ave, Vancouver) を使っていた。経済的に恵まれないインド人たちに援助をして路上生活者にならないようにすること、労働者たちの雇用案内所をつくること、土地を買うための計画を始めることが決められた。¹⁹

引用文中では、カナダで経済的に成功したインド系移民たちが、自分たちの暮らしを維持する目的のためにインド系移民間の相互扶助組織を形成し始めたことが述べられている。富裕なインド系移民たちは、北米に永住することを望んでいたのではない。あくまでも、必要な収入を短期間で得るという目的を達成するために、ブリティッシュ・ホンジュラスよりもブリティッシュ・コロンビアのほうが彼らにとって条件が良かったのである。

1908年の年末にはインド系移民の失業状況は改善されており、インド系移民たちは実際にはほとんどブリティッシュ・ホンジュラスへ向かわ

なかった。しかしながら、カナダで失業状態にあるインド系移民たちは職にありつくためにブリティッシュ・ホンジュラスへ向かうことをすすんで受け入れる可能性があったのである。少なくとも裕福な移民たちはそれを危惧し、貧しいインド系移民たちにカナダで職を与えるための組織を整えていったのであった。

一方、インド民族運動家の立場からしても、強制移住は移民排斥ひいては人種差別の現れであるとして政治問題化し得るものであり、移住を積極的に受け入れるインド系移民がいては都合が悪かった²¹。具体的には、政治的な目的意識から移民のブリティッシュ・ホンジュラス行きを阻止するべく力を注いだ運動家として、テージャー・スィング (Teja Singh) は特筆すべき存在である。彼は、移民たちのブリティッシュ・ホンジュラス行きを思いとどまらせてほしいというカナダのウダイ・ラーム (Uday Ram) らの要請に応じて、この件に関わるため合衆国からカナダへと向かった。カナダへやって来たテージャー・スィングは、ニューウェストミンスター・ミルサイド、バンクーバー、ポート・ムーディーで集会を催し、ブリティッシュ・ホンジュラスへ行かないように人々を説得し、地元で働くことを提案した²¹。また、テージャー・スィングは、バンクーバーでグル・ナーナク鉱業信託会社を設立し、貧しいインド系移民たちが働ける場を新たに創出したのであった²²。

さて、以上の検討から、ブリティッシュ・ホンジュラス行きをめぐり、富裕な移民と失職状態にある移民、そしてインド民族運動家のそれぞれが危惧する不具合の度合いや質には違いのある状況であったにもかかわらず、結果的には移民内で雇用機会を創出することにより三者すべてにとって有益な結果がもたらされたことが見出された。移民たちは単純に移民差別に対抗するために一丸となったのではなく、特に富裕な移民は自身の経済的利益の追求の意図をもって相互扶助組織の形成に関わっていたのであった。

4-2 カナダ・インドサプライ社の試み

バンクーバーのインド系移民たちの間で経済活動を展開する過程でコミュニティの凝集力が高まった事例として、第二に、1909年にウダイ・ラームとターラクナート・ダース (Taraknath Das) らが中心となって創設したカナダ・インドサプライ社 (Canada India Supply & Co, Ltd)

の例を検討してみよう。同社に関しては、有力な在バンクーバー・インド人政治運動家の活動の一環としてその存在自体は知られていたが[Johnston 1989: 9]、会社の具体的な業務内容や北米のインド系移民集団との関わりについては明らかにされてこなかった。一方で、カナダ国立図書館・文書館所蔵資料中の当時のインド人政治運動家に関する偵察記録中には同社の趣意書が残されており、活動の詳細を知ることができる。特に注目したいのは、同社が合衆国とカナダに在住するインド系移民の間に投資者を求め、1株25ドル、総計2000株により資本金5万ドルを集めようとしていた点である²³。移民たちが株を購入することで同社の運営を支え、なおかつ会社の利益を分け合うことのできる構造があったことを見出すことができる。

同社の社長であったウダイ・ラームは、1908年には食料や衣服や現金をインド人工場労働者に前貸しし重い利子をつけて返させることで2000ドルほどの利益を得る商店を経営していた²⁴。彼が行っていたインド系移民相手の商売、及びそれによって得た資産は、後にこのカナダ・インドサプライ社を設立する際の土台になっていたと考えられる。

1909年9月には、ターラクナート・ダースは活発にこの会社の設立のために取り組んでおり、また、同会社の趣意書が広くインド系移民の間に流通していた²⁵。趣意書によれば、既に資本金5万ドルのうちの半分は、バンクーバー周辺のインド人を中心として投資者が見つかったことが述べられている。同趣意書が広くインド系移民の間に広められていたのは、合衆国およびカナダに住むインド系移民たちの中に、新たな投資者を募るため、会社の概要を伝える目的があつてのことであった²⁶。

同社の業務内容は、第一に、カナダ、インド、アメリカ合衆国の三国間で貿易を行うことであり、第二に、カナダのブリティッシュ・コロンビア州の土地の売買を行うことである。ここでは特に、貿易事業に関する業務内容に注目してみたい。

カナダ・インドサプライ社の貿易事業は、基本的にはインド産の手工業製品の北米への輸入と、北米からインドへの機械製品の輸出との二本柱により計画されていた。特にインドからカナダ・合衆国への輸入に関しての見通しは趣意書に具体的に示されている。

ここ〔北米―筆者註。以下同じ〕で生活する多くのインド人は、ベ

ナレスの素焼きのカップや、フィンガーボールや、茶器などを載せるトレイや、燭台などといった品物が、どれだけの利益を生むかを知っている。これらは、インドでは10セントから40セントで入手でき、ここ〔北米〕では1.5ドルから3.5ドルで売られるのである。こうした品物を売って利益を得てきたという実際の経験に基づいて、本社ではこれらの品物の大規模な輸入を行う予定である。これにより、間違いなく大きな利益が生まれるであろう。²⁷

まさしく、インドから北米への輸入事業は、ウダイ・ラームなどのインド系移民たちがそれまでに北米で行ってきた商業の延長線上に計画されていた。手工業製品以外のインドからの輸入品目としては、トラの毛皮の敷物や、カーテン、肩掛けについても輸入予定があると言及されていた。また、北米のインド人の需要を受けて、水牛のギーや、菜種油の輸入を行う予定であることも述べられている。一方で、北米からインドへの輸出事業に関しては、インド各地に代理人をたてて、地元での需要を探りつつ機械製品などを輸出する予定であることが記されている²⁸。

会社の運営に関してその後の展開の詳細を把握することは難しいが、1914年にバンクーバーでターラクナート・ダースらによって発行されていた月刊誌『ヒンドゥスターニー (The Hindustanee)』には、同社の広告が掲載され、専務理事 (Managing Director) としてフサイン・ラヒームの名前が記載されている。ただし、『ヒンドゥスターニー』に掲載されたカナダ・インドサプライ社の広告では、同社が新たな信託会社法によって事業から撤退せねばならなくなったため、所有する不動産を安く譲ろうとしている旨が記されている〔*The Hindustanee*, No.1 1914: 8〕。1914年の段階で同社が全ての事業に関して経営を取りやめたのか、それとも不動産のみから撤退したのかは定かでないが、少なくとも1914年までの5年間は会社が存続していたことがわかる。

いずれにせよ、カナダ・インドサプライ社は、カナダ、合衆国、インドにまたがってインド系移民たちが展開した企業であった。同社の幹部となったターラクナート・ダース、ウダイ・ラーム、フサイン・ラヒームらは、いずれも北米における政治運動において1910年代後半以降も重要な役割を果たしていくことになる人物であったが、同社には彼ら以外にも出資者という形で多くの在北米インド系移民が関与していたので

ある。

5 おわりに

1910年代半ばに政治的事件を生み出すことになる北米のインド系移民社会を構成していたのは、移民してから日の浅い集団であった。彼らは19世紀末から20世紀初頭にかけて初めて北米に到着し、太平洋岸に集中して居住していた。インド系移民の移入数はカナダでも合衆国でも1907年をピークに急増したものの、移民制限をうけて数年間のうちに激減した点で特徴的であった。また、彼らの多くは当時世界中に海外移民を輩出していたパンジャブ地方の出身であった。

カナダへのインド系移民の移入は、香港や英領マラヤに一度移住したインド人がよりよい就労場所を求めて二次的・三次的に移動することで始まるようになった。ひとたびカナダにインド系移民がたどりつくと、カナダの状況は移民の出身地へと伝えられ、新たに多くの移民がインドから引き寄せられた。渡航にあたってはインドにおける3~4年分の貯蓄に相当する高額の渡航費を工面する必要があったが、これを用意できた者が高収入を期待して自由移民としてカナダへと向かうようになった。このように、1910年前後にカナダにやってきていたインド系移民は、能動的に自ら選択して同地にやってきた出稼ぎ移民であり、カナダでの定着性は低い集団だったのである。実際に、1911年の時点でカナダに在住していたインド系移民の過半数は1921年には同地を去っていた。

また、1911年カナダ・センサス個票を用いた分析からは、1911年の在バンクーバー・インド系移民の中には女性が一人も含まれていなかったことが示された。彼らは全体の9割を20代から40代が占めるような働き盛りの男性集団であり、その過半数は製材業に従事し、バラード湾やフォールス小湾南岸の工業地域に集まってきていた。移民たちの多くは非熟練労働者として働いており、年収はバンクーバー全体の肉体労働者に比べて少なかった。しかしながら、彼らがバンクーバーで得ていた年収はインドで見込める年収よりは6倍から11倍高く、出稼ぎのメリットになるような収入差が確かに存在していた。インド系移民たちは、就業傾向によって工業地域に集まるだけでなく、スィク教寺院や食料・雑貨店、不動産屋など、インド系移民の生活に必要なサービスを提供し得る施設や商店をフォールス小湾周辺に有していた。個票からは、民族運動

家として知られるG・D・クマールの情報も抽出することができたが、彼の居住地もフォールス小湾南岸に立地しており、スィク教寺院に隣接していた。

以上のようにして得られた1910年前後のバンクーバーを中心としたカナダのインド系移民社会の社会的・経済的特徴は、彼らの経済的成功への関心の強さと、潜在的な移動性の高さを示していた。カナダでの永住を前提とせずに短期的な経済的成功を求めるこのような性格は、カナダにおける生活状況の改善などといった問題についてインド系移民を無関心にさせ、現地におけるコミュニティの凝集性を低下させ得るものである。しかしながら、実際には移民たちは経済的な利益を保持する目的で相互扶助組織を形成したり、インド系移民の間に株主を求める会社を設立したりするなど、経済的成功を志向するなかで社会的紐帯を形成する場合があった。インド系移民たちのその後の政治事件への集団参加につながるようなコミュニティ内での社会的紐帯は、彼らの移民当初からの経済的利益の追求過程においても準備され得ていたのである。駒形丸事件やガダル運動への移民たちの集団参加は、先行研究で扱ってきたような表面的な政治意識の問題としてだけでなく、本稿で検討した移民たちの経済的・社会的基盤の中から再度捉え直していく必要があるだろう。

付記・カナダでの調査は、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」による支援を得た「東京大学大学院人文社会系研究科次世代人文社会学育成プログラム」(2011年度)の援助により遂行した。本稿中の地図1の作成にあたっては、東京大学人文社会系研究科特任研究員の高橋昭子氏にGISを利用した地図作成に関してご指導を頂いた。

註

- 1 1914年5月に蒸気船「駒形丸」に乗ったインド人376名が香港からバンクーバーに入港しようと試みるもカナダ上陸を許されず、およそ2ヶ月間バンクーバー沖で立ち往生した事件である [Johnston 1989; Josh 1975]。
- 2 サンフランシスコにて、革命思想を伝えるウルドゥー語やパンジャービー語などの週刊新聞『ガダル』を発行し、主にインドの外で運動の参加者や武器を集めた。実際に1915年2月には集団帰国シラホールで兵営反乱を試みたが失敗に終わった [Bose 1971; Sareen 1979]。
- 3 インド系移民が制限される法的な根拠になったものとして、これまでしばしば言及されて

きたのは1908年に出された27号枢密院令と1255号枢密院令である [Morse 1936: 100; Bhatti, 2007: 81, 110]。1908年27号枢密院令は、「移民は自分の生まれた国あるいは市民権のある国から連続的航海にて (by a continuous journey) [第三国からの出発を認めないことを含意―筆者註]、自分の生まれた国あるいは市民権のある国を出発する以前に購入された切符で渡航しない限り、カナダへ上陸すること及びカナダへ渡航することは禁止される」[P. C. 27, 1908]と取り決めている。また1255号枢密院令は、すべてのアジア系移民に対し上陸時に200ドルを携帯するよう求めるものであった。200ドル携帯を求める理由は、アジア系移民が現地で職を得ることが難しいことから一時的な生活資金を用意する必要があるためとされた [P. C. 1255, 1908]。また、違法にはその後も数百人のインド系移民がカナダへ入国していたという説もある [Singh and Singh, 1966: 5]。

- 4 カナダにおける1910年のインド系移民の人口については [Canada Year Book 1914: 60]を参照。原文で出自 (Origin) がHindu となっている人々を、インド系移民を指すものとして採用している。また、カナダでのインド系移民州別人口については、[Canada and Statistics Office, vol.2, 1912-1915: 162]を参照。
- 5 合衆国センサス調査局ウェブページの人口統計から、表C-10, “Asian and Pacific Islander, for the United States, Regions, Divisions, and States: 1900 and 1910” (<http://www.census.gov/population/www/documentation/twps0056/tabC-10.pdf>) を参照。原文でHindu となっている人々のことを、インド系移民を指すものとして採用している。
- 6 Swayne, E. J. E., 1908, “Information as to Hindu Agitators in Vancouver”, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, pp. 8-9.
- 7 調査票1は同一人物に対して行う複数のセンサス調査票のうち第1枚目のものである。名前、年齢、職業など基本情報を質問し列挙してある。筆者は、2012年12月までに、カナダ国立図書館・文書館ウェブページ内のウェブコレクションページにて地域ごとに分類された状態で公開されていた1911年センサス個票を閲覧した。(<http://www.collectionscanada.gc.ca/databases/census-1911/index-e.html>)
- 8 報告書によれば、1911年の時点でバンクーバー市の人口は12万3902人であり、そのうちインド系移民の人口は726人である [Canada Year Book 1914: 60; Canada and Statistics Office 1912-1915, Vol. 2: 162]。1911年におけるカナダの全インド系移民は2,342人であるため、全体の約3分の1程度がバンクーバーに集まっていたことになる [Canada Year Book 1914: 60]。
- 9 センサス個票に書かれた「出生地」(Country or Place of Birth) がIndia, Malay, Punjab のいずれかで、かつ、「人種的・部族的出自」(Racial, Tribal Origin) がHindo, Hindoo, Hindu, Hindus, India, Indian, Punjabi, Sikh のいずれかである者を、インド系移民であるとした。このように出生地と出自を組み合わせたことで、たとえば出自がIndian と表記される場合のある先住民や、インドで生まれたヨーロッパ系などの移民と、インド系移民との混同を避けることができる。1911年のカナダ全人口のうち、出生地がインドの者は4491人と報告されている [Canada Year Book 1914: 63] ため、インドで生まれているが出自はインド系ではない人々が1911年には2,000人程度カナダに在住していたのである。また、先住民の出自は、基本的にChippewa やCree といった部族名がわかる場合はそれを記すことが決められているが [Canada, Census and Statistics Office 1911a: 29]、実際の個票ではIndian と記されることもある。
- 10 1911年カナダ・センサスでは就業形態についても質問しており、同じ職業に就く者の中でも

熟練労働者、非熟練労働者、オーナー、仲介者を互いに区別できるようになっている。また、1911年センサスにおける職業分類の方法についてはカナダ国立図書館・文書館がウェブ上に公開している史料改題を参照したが、より詳細な説明は [Canada, Census and Statistics Office, 1911b]にある。

- 11 Criminal Investigation Department, Government of India, Circular No. 12 of 1912 (Simla, 17, Dec., 1912), "Indian Agitation in America" (Continuation of Circular No. 5 of 1908), p. 28, in British Library, OIOC, *Indian Political Intelligence (IPI) Files 1912-1950*, Vol. 13.
- 12 Swadesh Sewak, No. 2, Feb. 1910, in RG7, G21, File 332, Vol. 201, LAC.
- 13 Criminal Investigation Department, Government of India, Circular No. 12 of 1912 (Simla, 17, Dec., 1912), "Indian Agitation in America" (Continuation of Circular No. 5 of 1908), p. 39, in British Library, OIOC, *Indian Political Intelligence (IPI) Files 1912-1950*, Vol. 13.
- 14 1911年当時の為替レートに関しては、1 ルビー $\approx$ 0.325 カナダドルとして換算している [Denzel 2010:502; Powell 2005: 14]。
- 15 センサス個票から得られる住所情報を、[Henderson's Greater Vancouver City Directory 1911]や [Walker 1999]の情報と照合させながら、移民たちの空間的位置を特定した。
- 16 From E. J. E. Swayne to Mr. Collet, 20th Dec. 1908, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, pp. 1-2.
- 17 Swayne, E. J. E., 1908, "Information as to Hindu Agitators in Vancouver", RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 4.
- 18 From E. J. E. Swayne to Real Grey, 30th Dec. 1908, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC;
From E. J. E. Swayne to Mr. Collet, 20th Dec. 1908, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 3.
- 19 Swayne, E. J. E., 1908, "Information as to Hindu Agitators in Vancouver", RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 4. 引用文中に「月に4万ドル近くも蓄え」とあるのは、本稿で1911年カナダ・センサスの分析から明らかになった1910年の在バンクーバー・インド系移民の最高年収が1000ドルであったことと比べると額面の規模が大きく異なる。現実にはこのような規模での蓄財が可能であったのかどうかは不明である。
- 20 Swayne, E. J. E., 1908, "Information as to Hindu Agitators in Vancouver", RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 5.
- 21 Swayne, E. J. E., 1908, "Information as to Hindu Agitators in Vancouver", RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 4.
- 22 Swayne, E. J. E., 1908, "Information as to Hindu Agitators in Vancouver", RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 6.
- 23 The Prospectus of Canada India Trust Co. Ltd., enclosed with the correspondence of W. C. Hopkinson to W. W. Cory, 1st Sep. 1909, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC.
- 24 Swayne, E. J. E., 1908, "Information as to Hindu Agitators in Vancouver", RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC, p. 3.
- 25 From W. C. Hopkinson to W. W. Cory, 1st Sep. 1909, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC.
- 26 The Prospectus of the Canada India Trust Co. Ltd., enclosed with the correspondence of W. C. Hopkinson to W. W. Cory, 1st Sep. 1909, RG7, G21, File 332, Vol. 200, LAC.
- 27 *ibid.*

28 ibid.

参考文献

1 未刊行資料

カナダ国立図書館・文書館(LAC)所蔵資料

Governor General's Files; RG (Record Group) 7, G21, File 332, Vols. 200-201

英国図書館所蔵資料

Oriental and India Office Collections (OIOC), *Indian Political Intelligence (IPI) Files 1912-1950*, Vol.

13, "North America, 1912-1948"

ただし、マイクロフィッシュ版を利用した (Leiden: IDC Publication, 2000)。

2 刊行資料

Canada. Census and Statistics Office, 1911a, *Instructions to Officers, Commissioners, and Enumerators*.

Canada. Census and Statistics Office, 1911b, *Index to Occupations*.

Canada. Census and Statistics Office, 1912-1915, *Fifth census of Canada 1911* (6 Vols.)

Canada. Census and Statistics Office, 1914, *Canada Year Book 1914*.

Government of India, 1912, *Prices and Wages in India*, The Office of the Director-General of Commercial Intelligence, Calcutta.

Government of India, 1915, *Statistical Abstract Relating to British India from 1903-04 to 1912-13*,

London: His Majesty's Stationary Office.

King, W. L. Mackenzie, 1908, *Report of the Royal Commission Appointed to Inquire into the Methods by which Oriental Labourers Have Been Induced to Come to Canada*, Ottawa.

3 雑誌資料・住所氏名録

Henderson's Greater Vancouver City Directory, 1911(2 vols.) .

Singh, Saint N., 1907, "Canada's New Immigrant", *The Canadian Magazine*, Vol. 28, pp. 383-391.

The Hindustanee 1914, No. 1 to No. 6(January to June).

4 研究書・論文

スーチェン・チャン、住井広士(訳)、2010、『アジア系アメリカ人の光と陰—アジア系アメリカ移民の歴史—』、大学教育出版。

浜口恒夫、2000、「カナダにおける南アジア系移民社会の変容」、古賀正則ほか(編)、『移民から市民へ—世界のインド系コミュニティ』、東京大学出版会、208-220頁。

Bose, Arun Commer, 1971, *Indian Revolutionaries Abroad, 1905-1922, In the Background of International Development*, Patna: Bharati Bhawan.

Buchignani, Norman and Doreen Indra. 1981, "The Political Organization of South Asians in Canada, 1904-1920", in Jorgen Dahile and Tissa Fernan (eds.), *Ethnicity, Power and Politics in Canada* (Canadian Ethnic Studies Association Series vol. VIII), Tronto: Methuen Publicatios, pp. 202-232.

Buchignani, Norman, Doreen Indra and Ram Srivastiva, 1985, *Continuous Journey: A Social*

- History of South Asians in Canada*, Tronto: McClelland and Stewart Ltd.
- Das, Rajai Kanta, 1923, *Hindustani Workers on the Pacific Coast*, Berlin and Leipzig: Walter de Gruyter.
- Denzel, Markus A., 2010, *Handbook of World Exchange Rates, 1590-1914*, Farnham: Ashgate.
- Johnston, Hugh, 1984, *The East Indians in Canada*, Ottawa: Canadian Historical Association.
- Johnston, Hugh, 1989, *The Voyage of the Komagata Maru: The Sikh Challenge to the Canada's Colour Bar*, Vancouver: The University of British Columbia Press.
- Josh, Sohan Singh, 1975, *Tragedy of Komagata Maru*, New Delhi: People's House.
- McDonald, Robert A. J., 2000, *Making Vancouver: Class, Status, and Social Boundaries, 1863-1913*, Vancouver: The University of British Columbia Press.
- Powell, James, 2005, *A History of the Canadian Dollar*, Bank of Canada.
- Sareen, T. R., 1979, *Indian Revolutionary Movement Abroad (1905-1921)*, New Delhi: Sterling Publishers.
- Singh, Khushwant and Satindra Singh, 1966, *Ghadar 1915: India's First Armed Revolution*, New Delhi: R. & K. Publishing House.
- Tatla, Darshan Singh, 2004, "Rural Roots of the Sikh Diaspora", in Ian Talbot and Shinder Thand (eds.), *People on the Move: Punjabi Colonial, and Postcolonial Migration*, Karachi: Oxford University Press, pp. 45-59.
- Walker, Elizabeth, 1999, *Street Names of Vancouver*, Vancouver: Vancouver Historical Society.

5 参照 URL

- 1) カナダ枢密院令(Orders-in-Council)データベース
<http://www.collectionscanada.gc.ca/databases/orders/001022-100.01-e.php>
 カナダ国立文書館・図書館のウェブコレクション上に、枢密院令のデータベースがある。本稿で参照したのは、1908年のP. C. (Privy Council) 1855, P. C. 1255 である。
- 2) 『カナダ年鑑』(Canada Year Book)データベース
http://www66.statcan.gc.ca/acyb_000-eng.htm
- 3) 合衆国センサス調査局による人口統計データベース
<http://www.census.gov/population/www/documentation/twps0056/twps0056.html>
- 4) カナダ1911年センサス調査個票
 筆者は、2012年12月までに、カナダ国立図書館・文書館ウェブページ内のウェブコレクションページにて地域ごとに分類された状態で公開されていた1911年センサス個票を閲覧した。(http://www.collectionscanada.gc.ca/databases/census-1911/index-e.html)2015年2月 現在、上記URL は使用されておらず、センサス個票はカナダ国立文書館・図書館の「オンラインリサーチ」ページ上で公開されている (http://www.bac-lac.gc.ca/eng/census/1911/Pages/1911.aspx)。
- 5) ブリッティッシュコロンビア住所氏名録オンライン
<http://www.vpl.ca/bccd/index.php/browse/index>

要旨

20世紀初頭北米太平洋岸におけるインド系移民は、駒形丸事件やガダル運動といった政治的事件に集団参加したことで知られる。従来の研究ではこうした事件を生んだ北米インド系移民社会の背景を考えることは関心の主眼になってこなかった。またインド系移民の政治的事件への参加はインド系移民内の政治意識の高まりや宗教的紐帯と関連付けて論じられてきたが、背景と成り得た移民内での経済的な相互関係に関してはほとんど議論されてこなかった。

そこで1910年前後のバンクーバー市を例にインド系移民社会の背景を精査し直したところ、彼らは出稼ぎ的性格が強くカナダでの定着志向性が低い集団であったことが示された。インド系移民たちは一見移動性の高い集団であったが、カナダでの永住を前提としない場合においても経済的成功を目指す中で相互扶助的な組織を形成したりインド系移民の間に株主を求める会社を設立したりするなど、社会的紐帯を形成することがあった。

Summary

The Formation of the South Asian Community in Vancouver during the Early Twentieth Century

Kaori MIZUKAMI

The South Asians who arrived on the Pacific Coast of North America in the early twentieth century are famous for their political activism in the Komagata Maru Incident and the Ghadr movement, among others. In conventional discussions, these movements have been argued chiefly through the perspective of some active political leaders, and the historical, economic, and social backgrounds of the South Asian immigrants on the Pacific Coast have often been overlooked. Moreover, the immigrants' participation in these political incidents has been argued to have connections with their political interests and religious organizations centering around Sikh Gurdwaras; however, the economic relationships among these immigrants has been under-explored.

This paper examines the target population's motives and methods of immigration, their living conditions in Vancouver around 1910, and their socio-economic relationships. Their most important reason for migrating to Canada was to earn a higher income. Through an analysis of The Census of Canada 1911, this paper shows that their wages in Canada were six to eleven times higher than in India.

Most of them had not intended to settle there permanently, but it was a suitable place for them to earn more money in a shorter period.

Irrespective of their mobility, through pursuing economic success, South Asian immigrants exerted themselves and strengthened their social ties by establishing mutual aid institutions and a company whose shareholders were immigrants to the Pacific Coast.